

ハリー・ポッターと足掻く者

らはん

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

原作知識を持ってハリポッターの世界に転生した少年は、物語の主要キャラ救済のために動き出す。

主人公は主に主要キャラ救済のために動きますが、たまに(だいぶ)私欲のために動くこともあります。

ただただ熱烈でミーハーなハリポタファンな主人公なのです。

目次

物語開幕前

1981年11月1日	転生しましたとき	1
1982年1月13日	箒と姉と兄と	4
1982年9月24日	朝の日課と原作考察	8
1982年9月24日	魔法の街へ	12
1982年9月24日	雑貨屋	15
1982年9月24日	導きの本	19

物語開幕前

1981年11月1日 転生しましたとき

俺は前世でハリーポッターの世界に傾倒し、映画や小説をはじめとする多くの関連作品を周回し、果てはSS作品も粗方読み切つてしまふようなかなり熱狂的なハリポタファンだった。

前世では特に自慢できる事ではなかったし自己満がほとんどだったが、こうも奇跡みたいな事が起こるとそれは他のなによりも素晴らしいプラス要素になる。

読者の予想通り俺は転生した、ハリーポッターの世界に。何故わかつたかは簡単、俺が一歳になった年のハロウィーンの翌日、この世界での父さんと母さんが新聞を見ながら『生き残つた男の子』だの『例のあの人』だの言つてたからだ。その日は1981年11月1日。そう、かのハリーポッターがヴォルデモートの魔の手から生き残つた日の翌日である。

：いやあつたああああ!!バンザイ!!!ハリポタの世界キタゾ!しかも年齢的にハリーと同じ年じゃん俺!!転生したって気づいたときはどうしようかと思つたけど、これは悪くない!てか前世より何百倍かはいい!

こんな感じで数日間喜びに満ちて騒いでいたが、(両親は両親でヴォルデモートが消えたことで魔法界中が浮かれてたので気づかなかつた)ある日ふと疑問を抱いてしまった。

俺がこの世界に生まれた意味とは?どう生きるべきだ?って

俺の名前は多分コーリー・スプラウス。俺の知る限りスプラウスなんて家系はハリポタに出て来てないし、もちろん聖28一族にも入っていない。しかし家の中を見た感じそこまで浅い歴史の一族でないようにも思われる。(フォイのとこみたいに大邸宅ってわけじゃないが、ポコリと出てる丘の上はかなりしつかりした造りの家だし、屋敷

しもべがいるのもうわかっている)

俺には原作知識以外にチートや厄介な血縁関係もないことが確認している。どこぞの吸魂鬼に崇められるような魔法生物の王でもないはずだし、魔法式の構造が見ただけでわかっちゃう天才でもないはずだし、どこぞの帝王やポッターやブラックといった主要キャラの血縁者でもないはずだ。

それに、俺になにか目的があるかと聞かれれば、それははっきりとノーと言える。もちろんこの世界を満喫したいってことは間違いないけど、どこぞの野望の化身みたいに世界を作り替えようとは思わないし、どこぞのフォイみたいに世界を作り替えようとも思わない。てか世界作り替えたいオリ主多くね？

しばらく考えてやりたいことは決まった。

オリジナルで死んでしまう主要キャラの救済である。できるならセドリック救済したいし、シリウスも救済したいし、ダン爺もスネイプ先生も救いたい。てかお辞儀の出番消して何事もなく七年間日常ENDが俺の理想ですらある。

でも現実問題これは不可能に近い。

これがチート持ちの俺強え転生者なら話は簡単だ。物語開幕前に分霊箱でもなんでも全部潰して、後は折を見てハリーの血でお辞儀復活させて瞬間的に(お辞儀にハリーを)アバダケダブラって、直後に(俺がお辞儀に)アバダケダブラすれば万事解決だろう。

しかし残念なことに今のところ原作知識チートだけの俺には荷が重い。セドリック助けようとしたら巻き添え喰らって死ぬだけだろうし、他のターニングポイントも知ってるだけじゃ止めることはできないだろう。

そこまで考えるとやることの答えは案外簡単に見つかった。

なんだ、どう動くにせよ強くならなくちゃどうしようもないじゃんか!?!と、

コーリー・スプラウス一歳と二ヶ月程、今日から最強を目指して頑

張ります!!

ママ「コーリー、あなたの名前はコールよ、コーリーは愛称よ」

パパ「ハツハツハ、確かにいつつもコーリーって呼んでるからな！
気づかなくても無理ないか！」

…え
???マジ
???

1982年1月13日 箒と姉と兄と

俺がどこぞの有名イケメン俳優と同性同名な、というか瓜二つじゃね？って件について。

鏡が映し出す幼くも整った顔を眺めて思わず唖ってしまふ。緑がかった青色の瞳にブロンズの髪、まだ一歳とちよつとだというのにわかつてしまう将来有望な顔。俺は知ってる、この子供らしい優しげな顔は、十代後半にはスツキリとした顔の女の子達がキヤーキヤー言うようなイケメンに化けるって。ぶつちやけ秘密の部屋や謎のプリンズでできたトム・リドルよりイケメンな顔立ちになるし、シリーズ内でトップの美貌を誇るセドリック役のロバート・パティンソンともいい勝負できるんじゃないやね？って位のイケメンっぷりである。

なに？あのロバート・パティンソンを知らない??罰としてフォイは10点減点！今すぐググってきてなさい!!

まあ転生したらイケメンに！ってのはベタだしなんも悪いことはない。寧ろサンキュー神様である。

さらに、である。実は本物のコール・スプラウスには兄がいる、しかも双子の。

この事実気づいた俺は、チラツと横を見る。

…いるんだよなあ、双子の兄さん。

デイルン・スプラウス、俺と顔がそっくりな双子の兄さん。こつちもデイルって愛称で呼ばれてたし、全く気づかなかつた。

…こいつも、転生者なのかな？ とにかく、利発そうで、勝ち気でやんちゃだつてのはわかるけど。わからんなあ…。

…更に、我が兄弟にはお姉さんがいらつしやつた。

あつちの双子に姉つていたっけ？

彼女の存在も前から知っていたんだけど、まともに会えたのはここ最近の出来事だ。二歳年上らしいのだが、物心ついたときから本を読み耽つて、ほとんど遭遇しなかつたようだ。…なんか凄くシンパシー

を感じるんだけどまさかねえ。

会ってみると凄いな美人？美少女？美少女？美少女？だった。ヘーゼル色の瞳（暗い緑と明るい茶の中間の色）に、フワツとした茶色い髪がセミロングでたれている。スツとした顔立ちにキリツとした瞼、うんやっぱり将来有望である。

名前はティラーだそうだ。

おつかしいなあ!? 将来瓜二つになりそうな人に心当たりがあるなあ!?!? 名前も一緒だなあ!?!?

：まあその辺はもう少ししたら聞いてみよう。たぶんこの方はコッチの人間だ。

さて、最強になる宣言をした俺は、まず魔法界の色々を学ぶことにした。言葉がわかってきたときの知りたがりの子供を演じ色々質問を投げつけたり、家の蔵書を漁ったりと。

一応言っておくとうちの本棚にはいわゆる闇の魔術系統の蔵書はなかった。ということとは、早計ではあるがこれは我が一家は死喰い人の、というかお辞儀陣営ではないと見ていいだろうか？ハリーがお辞儀を打ち倒した時の新聞を見ながら歓喜していたのを見る限りそうではないとは思うのだが万が一ということもある。

基本ハリー陣営に回る予定の俺としては親の立ち位置はしっかりと把握しておきたいところである。

代わりにということなのだろうか、我が家の蔵書のおおよそ九割が魔法生物に関する蔵書だとわかった。そういう家系なのか？闇の魔術の系統ではないが魔法生物の本としてはかなり刺激的な、禁書の棚に置かれそうな物も混じっている。この辺の理由ももう少し大きくなったら聞きたいところだ。

ラインとマイラの両親は俺の質問攻めに「こいつは色々なことに興味をもつなかなかの聡い子だな！（親バカ）色々教えて与えてやろう！」って感じで俺が興味を持った事にわかる範囲だけど真摯に受け答えをしてくれ、さらにいろいろな物を買って与えてくれた。ありがたいこ

とだ。

まずは二歳の誕生日に箒を買ってもらった。まさかのシルバーアローだ。ミーハー的には狂喜乱舞レベルなんだが出所が気になる。あれ？これ生産中止になったんじゃない？ってそれとなく聞いてみると

「コーリー、そんなことも知ってるのか！そうだ、確かにシルバーアローはもうかなり前に生産中止になっている代物だ。だから、生産中止したからといってそれで全滅というわけじゃない！コーリーはなぜこの箒が生産中止になったと思う？」

「えっと、コメットとかクリーンスイープとかニンバスとかいい箒がでてきたから？」

「違うな、確かにそれらの量産系が幅をきかせていたのもあるだろうが、一番は一重に人気がありすぎたからだ」

「人気がありすぎて生産中止？」

「そうだ、このシルバーアローは枝の一本一本まで全て手作りなんだ。だから生産量は他と比べると極端に少ない。その癖、性能は競技用と同等かそれ以上、実際生産中止前までは公式戦でもよく使用されていたんだ。さて、こんなに凄い希少な箒、どうなると思う？」

「どうなったの？」

「金持ち達が価格を釣り上げはじめ、最後の方には製作者への脅しだ。俺に寄越せって」

なんともお決まりの結末だな。と、微妙な気持ちになる。

「おっと、ちよつと怖い話だったかな？」

「ううん、それでどうしてパパがそのシルバーアローを買えたの？」

「ハツハツハ、実はちよつとしたツテがあつてな。実は今も現役クイデイツチ選手のフェルナンド・ジュークスはパパの親友でな、そのお父さんが、たまたまシルバーアローの製作者のレオナルド・ジュークスだったわけだ」

「えっ!?あのカラシオック・カイツのチエイサーの？。パパ凄い!!」

こうして俺はシルバーアローを手に入れた。ミーハー的にはカラシオック・カイツのクイデイツチ選手とラインが親友だということの

方が衝撃だったようだが。

1982年9月24日 朝の日課と原作考察

最早愛用してるとまで言えるシルバーアローを庭でブンブン乗り回す。

先月でやっとこさ三歳になったやつが箒を乗り回すな!だって?うるさいぞ、にわか共!かのハリーは一歳足らずでキャツキャツ、キャツキャツといいながら乗り回してるじゃないか!!

ん?ハリーは子供用箒だったって?...うるさいぞ、誤差だそんなもん。

「おーい、コーリー!待ってくれえ!!」

後ろからラインがクアツフル片手に追ってくる。ちなみにラインの愛箒は、ニンバス1000である。2000ではなく1000である。確か60年代後半に生産された代物だ。その割には乗り手が二歳だということもあるが、しっかりシルバーアローについて来れているから驚きだ。ちゃんとしつかりした手入れと改良が施されているのだろう。

最近ラインについて、たぶんマイラもそうなのだろうがわかった事がある。二人ともかなりの年代物好きだということである。

マグルにわかりやすい例を挙げるなら車だろうか?近年電気自動車が見れはじめる中で、尚もダッチチャージャーやらGTOを求めるクラシックカー好きの魔法使いバージョンみたいなものである。(ダッチチャージャーもGTOも知らないだっ!罰としてフォイは5減点!今すぐググってきなさい!!)

そして彼ら大抵最新のハイテクマシンに見劣りしないためにエンジンや車高、タイヤなどを変える、いわゆるリモデルというやつをやる。

ラインもその点は同じだと見受けられる。たぶん元からあるのは箒の柄の部分だけだろう。恐らく枝の部分は全て最新のかなり高価なのに違いない。

「ほーらコーリー、いくぞー!そーれっ!!」

そんなことを考えているとラインがクアツフルを投げてきた。箒

に乗ってのクアツフルのキャッチボールは最近の朝の日課である。

こんな日課を続けていると前世での疑問が一つ解けていく。それはクイディッチって実はそんなに疲れないんじゃないやね？である。論旨は簡単、箒に乗ってクルクル飛んでくだけならそんなに辛く無くない？という感じだ。

まあ実際にやってみるとなんととも愚かな考えだったと思うわけである。

ただ跨がつとけばいいと思ってるなら、それは大きな間違いだったのだ。上空数十メートルの世界は人が思っているより風が強い。バランスをとるだけで大変だし、これでクアツフルの投げ合いと截止まってるやるだけでも難しい。これを選手達は平然とアクロバット飛行しながらやっていくんだからすごいものである。

俺もここ半年でやつと空中で止まってる状態でならキャッチボールができるようになってきた。それに、クアツフルはクアツフルでもこちらは本当に子供用で、軽い柔らかいの安全設計だ。

本当の競技用のクアツフルを使えるのは成長期にある程度入ってからだなと思うと同時に、ホグワーツでのクイディッチチームへの加入が基本二年生からなのも実際かなり現実的な設定だったのだと改めて感心した。

ハリーが一年生で入れたのはポジションがシーカーだからだ。スィッチを目撃く見つける視野の広さと天性の箒捌き、そして曲がりなりに十一歳にの体を持ってしてなんとかシーカーにはなれる。しかしこれがチェイサーやビーターだったら全くこなせなかつただろう。

そして、それとは別に飛行訓練を別途でやっている。クアツフルと他のことに気を使わず、自由に飛ぶだけなら今の俺でもある程度はできるのだ。もつとも長時間やり過ぎると、腹筋と内股、さらには二の腕の当たりが筋肉痛になってしまふのだが。なるべく筋肉をつけるようなまねはしたくない。いくらイケメンになったからといって、身長が伸びない危険性はなるべく起こしたくないものである。

「朝から元気ねえ、コーデイ」

「やおお姉ちゃん、おはようさん！」

スイーツと隣を優雅に飛んでいるのは姉さんだ。最近朝に弱いことが発覚した姉さんは、大体この時間になると起きてくる。

姉さんも例に漏れずクラシック好きのようだ。使っているのは、エレビー・アンド・スパッドモア社のスイフトステイックという箒。なんと1952年生産の代物だ。それを自分専用にはチューンアップしている。

…本当に五歳児が？シルバーアローと並走してるんですけど???

デイラン？ あいつはたぶん裏庭だよ、今日も。

我が兄貴はどうも転生者じゃないってのがここ数ヶ月隣で見ってきた俺の感想だ。

…いや、素の天才ではあると思うけど。

デイランは俺達3姉弟の中で一番アウトドアなやつだ。すなわち一番魔法生物に興味を持ち、戯れてるやつでもある。

で、内の裏庭の小さな森にいるヒツポグリフと今日も戯れてるわけだ。

「僕は箒よりロジヤーと飛ぶ方が好きだね」

とは、デイランな言葉だ。ロジヤー（ロジャリテット）という名のヒツポグリフはラインが仕事中发现して保護してきたはぐれグリフだ。見つけた時はまだ飛べもしない幼体だったらしいが、今ではもう立派な生体だ。

姉さんが生まれる前に拾ったって言うし、今は6、7歳くらいかな？

ちなみにデイランの愛箒はオークシャフト79。1879年製造…だったっけか？ 確かスピードを上げるとカーブでもたつくってことであまり評判はよくなかった気がするけど…。

俺より上手く、早く飛べるんだよなあ。

絶対こいつ才能あるよなあ、いいなあ。

俺もロジヤーに乗りまくったらうまくならないかな？

転生者より、現地天才の方が強い件について…

でもこれだけ才能あったら原作でも良さそうな気がするんだけどーよ???

「よし、今日はこのぐらいにしとくかー!」

しばらく姉さんとおしゃべりしながら並走しつつ黄昏れていると、ラインから終わりの合図が聞こえてきた。

「うん、そうだね! ねえ今日は本買いに連れてつてくれるんでしょ?」

「あら、私も欲しい本があるの。ちようどいいわ、連れてつて♪」
姉さんが答える。

「ん? そうか、もう約束してた日か! いやいや忘れて忘れてた! 急いで準備してくるから待つてくれ」

ちよつと抜けてるラインが、ハツハツハと笑いながら地上へ降りていく。

「ちよつと! 忘れないでよね! 楽しみにしてたんだから!」

そう、今日は待ちに待った本購入の日である。強くなるためには沢山の知識を蓄えないと! 俺はそう意気込むとシルバーアローの柄をゆっくりに向けて降りていった。

「もー! 忘れたお返しに今日は沢山おねだりするもんね!」

「ハツハツハ! お手柔らかに頼むぞコーリー」

丘の上の家からは今日も楽しげな笑い声が聞こえてくるのだった。

1982年9月24日 魔法の街へ

俺とテイラン、ラインにマイラそしてテイラー姉さんの家族全員で最寄りの大規模商店街にむかう。もちろんお目当ての本屋はマグル達の店に紛れているので移動は車だ。ちなみに我が家のマグル用の車はポルシェの356Aの黒だ。(は？ポルシェ356Aを知らない??君は名〇偵コ〇ンも読んだことないのかい?…え、これでもわからないの!?罰としてフォイは20点減点!さつさとググつてきなさい!!)

まあクラシックカー好きにとっては、涎が滴るレトロな名車である。

ポルシェが町外れから少しは賑わいのある街道に出て来た時、ラインがバックミラー越しに聞いてきた。

「それで、コーリーはなんの本が欲しいんだい?」

「うーん、とりあえず今日は呪文学の本が欲しいな!」

この呪文学の選択、実は消去法をして考えた結果だったりする。ハリポタの Hogwーツ内で描かれている、一年生からの授業分野は全文で八つ。

変身術、薬草学、魔法史、呪文学、闇の魔術に対する防衛術、天文学、魔法薬学、そして最後に飛行訓練で八つである。

この八つの内俺の目的であるキャラ救済を考えた上で、何を先取りして学ぶべきか考えると、魔法史、天文学はまず消える。

次に飛行訓練はもうやっているので除外、薬草学、魔法薬学についてはどうやらマイラ母さんに心得があるので除外。

すると残りは、三つ。後は感覚的な問題で、闇の魔術に対する防衛術は二歳がおねだりするにはちよつと気味悪がられそうなので、そして変身術は姉さんがそれなりに買ってもらっているらしいので除外だ。

まあ呪文学こそ魔法の基礎中の基礎だ、と個人的には思うので、しつかり精進したい所だ。

「そうかそうか。さすがにコーリー、勉強熱心だな! それで?」

「デイルはなにがほしい??」

「うーん、あんまり考えてないんだけどなあ。姉ちゃんの変身術で、コーリーは呪文学だろ? それ以外で体を動かせるのがいいな」
デイルはデイルランで相変わらずだった。

気づけば周囲の景色がだいぶ賑わっていた。前世で観光で訪れたロンドン郊外とは少し建物の趣が違ったりするので違和感を感じたが、前世で行ったのは二千年代のロンドンだし、別にここがロンドンというわけでもないかと思ひ直す。

ほどなくして、ポルシエは一つのパーキングエリアに止まった。

「さあついたーんこ、オスロじゃ一番の商店街だ!」

素晴らしいながらラインが出ていくので後に続く。

見た感じ『なんとというか期待外れだ』と、コールは思った。八十年代の街並みにがっかりする自分に心の底で突っ込む『そりゃ八十年代だ、高層ビルがボンボン立っているとでも思ったかい? 違うだろう??』って。

そんな気持ちも商店街に入ればすっかりなくなった。やっぱり商店街はいいもんだ。なんと言っても活気が溢れている。そんな穫れたての野菜や魚が所狭しと並んでいる市場を見ていると、その隙にラインが消えていた。

あわててみると、ちょうどマイラが消える所だった。続いてテイラー、消えた所まで行くとそこは一人がぎりぎり通れそうな横道だった。

「コーリー! 早く来いよ!」

デイルランが横道のさきから手を振っていた。意を決して横道に入るとその先で家族全員が待っていた。なぜかマンホールを中心にしていた。

「よしっ、コーリーも来たな。それじゃ始めよう」

そういうとラインはマンホールを杖を使って叩いて行く。

「ねえ、お父さんは何やっているの?」

いきなりラインが滑稽なことをやり出したので、隣にいたテイラー

にこつそり訪ねる俺。

「これはね、魔法使いの秘密の街に行くための合言葉みたいなものなのよ♪ロンドンではパブの裏庭のレンガを叩くっていうでしょ？ここ、オスロの場合は…」

ガコンツ!!!

ものすごい音がしたので振り返って見てみると、マンホールがシュルシュルと音をたてながら上に伸びていた。

下から出て来たのは、円形にそって降ろしてある金網と上下ボタンがついている箱…。

「…こんな感じでマンホールをエレベーターにしているわけ♪」

俺はこの時どんな顔をしてただろう？

とにかく言えるのは『魔法ってすげえ!!!』ただこれだけだったに違いない。

1982年9月24日 雑貨屋

オスロの魔法街は地下でした！っと。

ハリポタ、魔法、地下と来ればロンドンの地下にある魔法省が思い浮かぶが、オスロの魔法街はそれとはにても似つかない場所だった。

真っ暗な地下にフワフワと浮かぶ光の玉(ダンブルドア校長の火消しライターから出てきそうだとコールは思った。)がいくつも浮かび、魔法省の厳粛な雰囲気とは違うファンタジーな世界を演出している。

道のあちこちでは、

「ハンガリーホーンテールの肝が何でこんなに高いのさー！」

「そりゃハンガリーホーンテールはドラゴンの中でも一番獰猛な種類でさつ。そう簡単に肝なんて市場にあがらのでさつ。それで不満ならこっちのノルウェー・リτζバックのでどうでさつ。お安くしまさつ。」

「そんなへっぽこ種の肝なんてアタシ一人でも獲れるわ！ささつ、値切りさ、値切り！その辺の雑魚種の肝だって三十グラム十三シツクルもするのにな、ハンガリーホーンテールのは三ガリオンに五シツクルだって??アタシをなめんじやないよ!!」

「そんなあ…これは正規の値段さつ、少しもさげれないさつ…」

と言った値切り交渉が盛んに行われていて、活気に満ちあふれていた。

いつやあ、すげえよ魔法！うん、こりや凄い！

こんな感じの意味のなさない贅辞の羅列が、コールの頭の中を埋め尽くしていた。

「ようこそ、フィン横丁へ！」

俺の驚いた顔を満足気に見たラインはそういった。

…しかし、フィン横丁ねえ、コールは考えた。

ちよつとした豆知識なのだが、ダイヤゴン横丁の横丁名は対角線を意味する「diagonal」から来ているそうだ。さらに、英語で Diagon Alley (ダイヤゴン横丁) というのと Diagonally (斜めの) と同じ発音になる。だから建物も斜めに建てられ

ているらしい…。

フィン横丁 (Fin Alley) ねえ…。横丁の歴史に少し興味が湧いたコールであった。

「何ボサツとしてんだコーリー、きつさと本買いに行くぞ！」

「わかつたつてデイル！ 待って、引きずらないでえ！」

気づくとまたはぐれかけていたコールは、呆れたデイルランに引きずって行かれた。

『フローリシユ・アンド・フロツツ書店くオスロ支店く』という看板を目にしてコールは立ち止まろうとしたが、テイラーに引きずられてそのまま通り過ぎてしまった。

「なんだい、本と言えばフローリシユ・アンド・フロツツ書店だろ？ どうして通りすぎるのさ」

コールの疑問に、マイラが答えた。

「それはね、コーリー。これから行く店にも大抵の教科書は置いてあるし、こっちの方が掘り出し物が見つけられるかもしれないのよ！ まあ安いのが一番の理由だけどね…ほら見えた！」

マイラが指さした方は通りの端で『ハーファングの雑貨店く古着・古本・古雑貨、何でも売ります何でも買います』と、剥がれかけている看板に書かれた古ぼけた店があった。

「ちよつと古いのは気にしないでね」

マイラはちよつと笑いながらそう付け加えた。

古ぼけている店だけど、よく見れば最低限の手入れはされているし以外と、いや、かなり大きい。創業は1327年、かなりの老舗なのか…。

しっかりと見たコールの感想である。よく見れば表の看板も埃一つついてない。『古き趣のある雰囲気漂う、知る人ぞ知る名店』と、

コールは評じた。

それにしてもハーファンングか…まさかマンタとかだったりして。それはないか。

そんな一抹の不安を抱えながらコールは店に入ろうとした。しかし、

「私が先よ、コーデイ」

そう言つて、テイラーに先を越されてしまった。

「なんだい、一緒に入ればいいじゃんか！」

そう言つと、ラインが笑いながら言つた。

「いやいや、それじゃあダメなんだよコーリー」

「なんで？」

デイランが聞いた。

「それはな、この店が特殊な魔法にかけられているからだ。

この店に入るたびに置いてあるものが違う。

店主曰く、自分が本当に欲しているものだけが目の前に置かれるのだそうだ。

自分が欲しているものによつて中は千変万化、一冊の本しか置いて無かつたりするときもあれば、四方にいろいろな物が置かれてる時もある。

まあそれは入つたその時々のお楽しみだな！」

「つまり、二人で入ると二人分の欲しいものがごちゃ混ぜになつて置かれてしまうんだよ」ラインが面白そうにいった。流石魔法、流石ハリポタ、描かれてないところでも不思議レベルが下がることを知らない。

話を聞いて期待度がマックスになつた兄弟がソワソワと落ち着きなく待っている、テイラーが店から出てきた。

「見てみて♪『アニメーガスく歴史から原理を紐解く』を手に入れたわあく♪それもたつたの一ガリオンで！」

テイラー姉さんはいつもにも増して上機嫌だった。

ハリポタミーハーのコールも初耳の書名だが、どうやら相当なレア本らしい。また一段、コールの興奮メーターが上がつた。

「よかつたなテイ、どうやら満足行く本が見つかったようだ。よし、それじゃあ次はコーリーの番だ！ほら、お小遣いの一ガリオンだ、よく考えて使いなさい」

コールは一ガリオンを手に取り、ドキドキと興奮のままに店に入っていた。

1982年9月24日 導きの本

店内はひっそりと落ち着いた雰囲気をはっしていた。その一角に数段ある本棚が置かれ、中にぎっちり和本が詰まっている。その横には細長いテーブルが置かれいくつかの雑貨が置かれていた。

「いらっしやい少年」

不意に真横から声がしたので見てみると、そこに一人の老人が座っていた。

「わしがこの店の主人じゃ、会計もわしがするからな、ゆつくりと選んできなさい」

コールはうなづくのと、とりあえず本棚へと向かった。

コールが買おうとしていたホグワーツの呪文学の教科書『基本呪文集』や、アメリカの魔法学校イルヴァーモニー校の教科書である『チャドウィツクの呪文集』は全巻揃って見つかった。

当初、買う予定だった物を見つけ手を取ったが、マイラの「掘り出し物が見つかるかも」と言う言葉を思い出して当たりを観察し始めた。

するとあるわあるわ、『オリバンダー杖作り十代の記録』といっためちやくちや読みたい本や、『ウェンデルリンの変わった魔術』といった一見なぜここにあるのかと言う本まで、ピンからキリまで揃っていた。

すげえ、どれも原作にはなかった本ばかりじゃん！と、夢中になって手にとつてはペラペラ、手にとつてはペラペラしていると、本棚の一段が耐えきれず横にガツツと倒れてしまった。

あたりに埃が舞う。ゴホゴホ咳き込んでいると、倒れた一段の裏になにかが挟まっている事に気がついた。

俺はそれがなぜか無性に気になった。

おもむろにそれを引っかく。本がドサドサツと落ちてしまった。手に取ったのは古ぼけた一冊の本だった。使い古してあるのか、手垢がびっしりとついている。

本の題名は『闇の魔術教本』と、シンプルなもの。

しかし、問題はその著者にあった。

ネリダ・ヴァルカノヴァ

あー、わからない人も多いだろう。あのダームストラング校の創設者である。

ホグワーツの創設者達には劣るかもしれないが、間違いなくビッグネーム。

いや、闇の魔術に関しては彼等より抜きん出てたに違いない。かのグリンデルバルトを輩出した学校の創設者である。

もしかしたら、と、思う。

もしかしたら、ヴォルデモートに拮抗する力を持つたのではないかと。

そんな人が書いた教科書だ。最強を目指す俺にとっては自然この本が必要だと思った。

ほしい、絶対に手元に置きたい！

しかし、この本だけを持って出て行つては両親や姉兄に白い目で見られて、最悪取り上げられるのは目に見えている。

俺は本を隠せるような雑貨がないかと机の方に移動した。

細長い机に置いてある品々はこれまたピンからキリまで揃つていた。

半分効果がなくなっている透明マントや、使用済みポトキーなど誰がいるのやらと思いつながら物色を続けている先に、一つのポーチがあるのを見つけた。

黒だが妙に光沢のある革製…。俺はそれがドラゴンの革製だと直感した。

手にとつて見る。軽い。

これならちよūdいいかと思つて開いて見ると、俺は思わずにやけてしまった。

「検知不可能拡大呪文…、完璧！」

俺はホクホク顔で老人の元へ向かった。

「んん？ 選んだかね？！ どれどれ、……このポーチは、13シツクルと14クヌートじゃな。検知不可能拡大呪文つきなんて掘り出し物じゃの。そしてこの本は……！！！！」

そういえば家族にバレないようにとか以前に、この老人に見せるんだったよなあ、失念してた。

と、明後日の方向を見ながら現実逃避する俺。

ミスったあああア。これじゃどつちにせよ手に入らんルートじゃん！ やっちまったあああア……。

「クツ…ククツ…：カツハツハツハツはあ。いやいや久しぶりにたまげたわい。それで？ 少年は何を欲していたんじゃね？」

俺が内心orzつてたら老人が笑い出した。

あつなんか許されそう。

「一応、呪文学の本を探しに来てたんですけど…」

「違う違う、わしはそんな表向き的事なんぞ聞いておらん。少年、お主の心の中にある望みはなんじゃと聞いておるのじゃ！」

望み？ そう聞かれて答えられるものは一つしかない。でも……俺は少し考えた後、素直に答えることにした。

「望み、強いて言えるとするればそれは最強の魔法使いになりたいという望みです（原作キャラ救済のためにな！）」

「カツハツハツ。…最強を求め、か。言うは易し、じゃが成るは難し。しかしの、この本が現れる時点でお主の信念は相当なものじゃ」
老人はそこで一旦言葉をきった。

「…少年、お主のその心意気を買おうじゃないか！ フフツ、ネリダの爺も自分の魂がこんな聡い若いのに継がれて満足じゃろうて」

「あ、あの、そういうあなたはもしかして…」

「ああ、ネリダがわかるなら、わしのこともわかるか。その通りじゃ、

わしはハーファング・マンター。かつてはダームストラング校の長をやつてたがの、今はただの爺じや。」

「なるほど、あの、ここにはこういうものがまだ沢山……?」

「うむ、ここにはダームストラング校で使わなくなつた、忘れ去られたものがたくさんある。その中にはその本のように次の持ち主をずっと待ち続けているものもある、そういう店なのじや。そして、そういう品々は滅多に並べられることはない。」

ここでハーファング老は身を乗り出していつてきた。

「よいか? お主はその本を選んだのではない。その本に選ばれたのだ。そこをちゃんと頭に入れておくんじやぞ?? ……ネリダからは自分の所有物の継承者へ言伝を預かつておる。『私の遺品に選ばれし者へ。私の遺した物は強力だが危険で、魅力的だが、難解だ。自分の志した道に違わぬよう精進してほしい』：実はネリダに自分のやつには金をかけるなど言われてての。その本はタダじや持つてきなさい。」

：他に何か買いたいものはないかね?」

俺は本を買いに来てポーチだけを買つて出てくるのもおかしいと思ひ、手頃な本を一冊買つて店を出た。